

第八話

秘境の下水文化紀行

カメラマン気質

私は、ちょうどまる二十五年間に、約二十箇所程、世界の秘境という所の探検、登山等を通じてきたわけです。司会者の方から下水道関係に関するお話をと、言われているんですけども、私の行く所はあまりそういうことと縁がありません。トイレの話を変えたいと思うんですけど、あまりお役には立てないと思うんですが、体談ということでお話しします。

私の行く所は、人のあまり行かない奥地ですので、大変危険を伴うわけです。例えば、どんな危険にあったかといいますが、カナダの北極圏では、シロクマですね、いわゆる、ポーラベア、ホッキョクグマ。これは、飛行機をチャーターしまして、パイロットにシロクマの写真を撮りたいからと、デボン島の海岸一面が凍結している所に不時着したんですよ。それで、ちょっと飛行機から降りてみますと、凄く大きな、巨大なシロクマが一頭現れた。私は飛行機から五十メートル

藤木 高嶺

程離れていました。私から、シロクマまで約八十メートル。だから、シロクマから飛行機までは合計百三十メートルあるわけです。私は百三十メートルシロクマが走るよりも、私が五十メートル走る方が遙かに速いと計算しました。それと、海の一部が割れているから、そこは飛び込んで泳がな、いかに。それで、なるべくシロクマに接近して写真を撮り始め、一本全部フィルムがなくなつたので、直ぐ入れ替えて撮り始めると、立ち上がったんですよ。二本足で。ウオーって、凄いい唸り声ですね。それは襲う時のしぐさなんです。私は、もうカメラもって必死に走って逃げました。飛行機に飛び乗ってドア締めたら、真下に来てたんですよ。だから、私が、もし、つまづいていたらもう、おしまいですね。

やっぱり、カメラマンというのは、いい写真撮ろうと思つて無理するんですね。ベトナム戦争で死んだ人は、ほとんどいないですね。ほとんどカメラマン、ロバートキャバ



八十メートル前方の浮氷上にあらわれたシロクマ（カナダ北極圏、デボン島で）

をはじめ、日本のカメラマンも数人死んでますね。沢田教一、ピュリッツ賞を貰った、ああいう人をはじめ、沢山いる。

カメラマンって…。記者は見てきたような嘘を書きますけどね。だから非常に無理する。例えば私がまだはしりのカメラマンの頃に、「火事だ」と出掛けるでしょ。どうか現場に行くまでに火事が消えてませぬようにと願っているわけです。当事者にそんなこと言ったら、殺されますけど、いつもそう思っている。記者の方は消えてから行っても周りの人の話聞いたり、指令車に話聞けば、目撃したように、書けますよ。写真というのは、そういう時、よりつらい。シロクマのときも、パイロットにさんざん怒られました。命を大切にしない。分かっているんですけど、やっぱり写真撮りたい。アラスカへ行きまして、デナリ公園でグリズリベア、これはもっと、どう猛なクマです。この写真を撮ろうと思ってジープをチャーターしまして、走りまわった。そしたら運良く親子連れの、これまた巨大なクマが草原で戯れているんですよ。親子連れだし、夢中になって戯れているから、危険は無いだろうと思って、私はジープから五メートルくらい離れた。その時はグリズリベアまでが三十メートルくらい、これは本当は、逆なんです。親子連れだから危険なんです。子供を守るために。写真撮り始めると、いきなり、ウォーッと、飛びついてきたんですよ。その時は私はもう、腰抜かして、あ

まり巧く逃げられなかったんですけども、ドライバーが、クラクションを最大にならしてエンジン音を響かせてくれた。それでクマがびっくりして、私を襲わず直角に逃げたんです。ドライバーに怒られてね。運転して、帰ってくるまで、私はどなられていたんです。まあ、どなられようが、何しようが、写真撮った者が勝ちや。だけでも、確かに危険です。襲われていたら、もう、ここに居ませんよね。

探検の喜び

それから、ジャングルなんかに行きますと、毒ヘビが出ますね。フィリピンのパラワン島には「幻の民コノイ族」が樹上家屋、つまり木の上に家を造って住んでいるんですね。世界でもここだけなんです。私たち関西学院大学の探検隊が三年がかりでやっと発見した、これは世界で初めて。

第一次、第二次は関西学院大学の教授が探検隊長になって行かれたんですけども失敗する。三度目に私が隊長になって、三人の学生を連れて行った。私は、カメラマンでもあり新聞記者でもあるから、今までの体験でかなりいろんな方法論が巧いんですよ。学生は、まだまだそういう点駄目ですからね、その教授は学者ですから、あまりそういう奥地に進んでいくという体力も、もっておられなかった。私が隊長になって行って、えらい苦勞しましたけども、遂に、コノイ族との接触

に成功しました。やはり樹上家屋に住んでいました。

低い家は非常に湿気が多い。必ず毎日雨降りますから。高い所の家というのは、健康上、非常にいいわけですね、乾燥してますから。それに例えば動物だとか、敵を発見するためには、火の見櫓みたいな役目をしますね。

私は最初低い家に住んでいたのでですけど、アブラムシが大群でおるんですよ。夜中、寝返りうって朝見ますと、下敷きになって何十匹も死んでいる。寝相が悪くて、口開けていたら、百パーセント入ってきますよ、口の中に。気持ち悪くてね。ところが高い家は七メートルくらい登っていった木の上に、パンダナスの葉で屋根と壁面が作ってあって、床には竹が並べてある。本当にターザンに出てるような家を、木の上に建てるんです。それで、高い家に住むことにしたんですけども、非常に居住性がいい。それに、私はアブラムシが気持ち悪かったんですが、高い所は一匹もない。乾燥しているから。

樹上家屋は二軒並んでいて、一軒はちょっと低い。高い方の家はいきなり上がるのにルートが危険なんです。低い方はしっかりした梯子があるので、私は低い方の家へ先に入って、そこから高い方の家に丸太棒三本だけのブリッジを渡って行って寝た。それを毎晩やった。

ある晩、丸太棒のブリッジを渡ろうと、真ん中辺りに来た



まるで鳥の巣のような樹上家屋
に住むコノイ族（フィリピンのパラワン島で）

とき、足元を懐中電灯で照らしたら、ピカッと丸い眼が光る。何と、アオハブ。これは、猛毒ですね。グリーンのアオハブがどろろまいてるんですよ。どうしてそこに上がってきたのか、不思議なんです。下はヘビが沢山おりますけど、上はいないと思ってたのに、上がっていた。私、そんなこと知りませんから、もうちょっとで嘔まれるとこでした。右足を上げて気がついた。上げた右足を降ろせませんね。これ降ろしたら、もうバクッとやられます。やられたら血清を持たないから、もう絶対に助からない。私その時ね、悲鳴を上げたらいいんです。そしたら、サナという男が、すっ飛んで来ましてね、「絶対動くな」言いました。動くな言ったって動かせんよ、もう怖くて。ガタガタ震えているんです。もう、本当に息が詰まりますよ。すると、サナがね、長い竹を持って来まして、私の後ろにびったりくつきまして、その竿でヘビをつつくんです。ヘビは鎌首もたげているんです。竿でつきますすと、ヘビは、その竿に関心を示してね、竿に嘔みつき始める。ガーツと嘔んでる。私のすぐ足元ですよ。そのうちに完全にアオハブが竿に乗り移った時に、竿ごとジャグルに投げて私は助かったんです。

あの時もう一步進んでたら……。踏み付けると絶対嘔まれません。百パーセント、今ここにこうしておりませんけども。もう、その時は、ヘビの恐怖が忘れられず、高い方の樹

上家屋へ行っても寝られないんです。アオハブがまた上がって来て、襲いに来るんじゃないかと思って、もう、本当に怖くて寝られなかった。

ところが、バンダナスの葉っぱで造った二方開けっ放しの小屋でしょ。寝てますと、ホタルの大群が中に入って来たんです。渦を巻いて乱舞し始めた。あんな光景初めて見た。もう、素晴らしい光景ですね。それで、先程のヘビの恐怖をすっかり忘れて、熟睡することができた。もう、ホタル様様だったんですね。

それから、砂漠へ行けば、一番怖いのはサソリですね。猛毒のサソリ。サソリに刺されたら、血清が無いと助かりません。ベドウィンの女が足の裏を刺された。それで私たちに治療してくれると呼ばれたんですけど、足の裏って、はだして生活しているから、象の足みたいな、そんなのどこ刺されたのか、場所分かりませんよ。まあ、直ぐナイフで切って血を吸って、（そのとき口の中に傷があると駄目なんですけど）完全に唾液と一緒に吐き出すという、方法はあるのだけど、足の裏だったらどうしようもない。それで、アンモニアを垂らしてやって、後はせいぜい痛み止めのセデスを飲ませるだけですよ。もうそれしか治療の方法が無い。しばらくしたら刺された側の足が腫れあがって丸太棒みたいになった。そして、ただひたすら、コーランのお祈りの言葉を唱えるだけ

なんです。一生懸命祈っているわけなんです。一週間したら、腫れが引きました。ああ、直ってよかったなと思つたら、完全に失明しましたね。両目とも。結局、毒が最後は目に来たんです。命は助かったけども、大変気の毒だった。私たちがつたら耐えられないですから、まず、死んでます。サソリは怖かったですね。だから、行く先に動物だとか、いろんな恐怖があるんです。

例えば、ニューギニアとか、パラワン島のジャングルへ行けば、ヒルがいますね。首すじに上から落ちてくるヒルもいます。それから以外に怖いのが、昆虫なんです。もともと、猛獣、毒蛇の類は人間が一番怖いんですね。人間が天敵なんです。人間が近付くと匂いなんかで、むこうが先に逃げてくれる。出合い頭だと襲われますけど、普通は人間が怖いから逃げる。百パーセント逃げてくれないのは、昆虫です。例えば、カとか、アリだとか、ブヨだとか、ハエ。ハエでも、猛毒のがあります。フィリピンで体験したのは、ヌカカ。小さな力ですけど、その大群に襲われますと、例えば露出した所は真っ黒になりますよ。一面にとまりますから。これはね、日の当たる所へ出ると、絶対追つてこない。マングローブなどの木かげにだけいる。そういうのにやられて、全身腫れ上がって、高熱で死にかけたことがあります。だから昆虫は怖いです。猛獣よりも逆に怖いと思いますね。

それで、何のために危険をおかして、命がけて探検をするのか、と自問自答するわけですね。だから、そのときはもう二度とこんな奥地の探検なんかやるものか、これが最後だといつも考えるけど、ところが帰ってきたら、ケロツと忘れてまた出掛けるでしょ。これは、例えば植村さんが死ぬまで冒険を続けて、最後はマッキンリーで命を落とした。三浦雄一郎さんも極限のスキーを次から次にやり続けている。今井通子さんも同じようですね。堀江君なんか、ヨットによる冒険を次から次と、やるでしょ。やっぱりこれ、私の探検と同じだと思ふんですね。苦勞すれば、苦勞するほど感激が大きいか、また行きたいと。皆さんもそういう体験お持ちだと思いますね。

決死のベトナム戦争取材

私が一番命がけだったのはベトナムなんです。

ベトナム戦争というのは、歴史に残る大戦争ですよ。あんな、歴史に残る大戦争は、やっぱり両側から、取材せないかと、私と本多君は考えたわけです。当時の日本のマスコミで報道されているのは、アメリカ軍と政府軍の発表ばかりです。勝った勝った、敵、北ベトナム解放戦線側には多大の損害を与えたという発表ばかり。日本の戦争中の発表と同じで、敵側の解放戦線やら、北ベトナム側のニュースはゼロに等し



ベトナムの解放戦線の最前線には
米軍のヘリもあらわれ、ロケット砲撃や
機銃掃射を浴びせた。

い。これは両側から取材しなければ、あんな歴史に残る大戦争の本当の意味は分からない。解放戦線側の戦う姿勢が分からないというんで、私達は、解放戦線側に潜入しようと、地下組織に秘密に連絡をとった。

どうして連絡とったかといえますとね、北ベトナムやら、中国へ行く朝日の上層部の人に、私たちの嘆願書を持参してもらったり、とにかく、あらゆる手段で地下組織に連絡をとった。駄目なら、駄目だという連絡が欲しいけど、全然こない。我々は、サイゴンに数か月いて、アメリカ軍に従軍したり、政府軍に従軍して、いわゆる政府側の取材をずっと繰り返していった。そのうちに許可がくるだろうと。ところが、全く来ないんですね。会社でも秘密の取材を知っているのは三人だけなんです。私たち二人以外に。これがばれますと、壁に耳ありで、情報が流れれば、私達は逮捕されますからね。政府軍に殺されるかもわからない。だから、徹底的に秘密を守って、朝日新聞のサイゴン支局長と支局員の二人にも全く内緒にしていた。

それで、本社の方から、編集局長が、もういい加減にして、あきらめて帰って来いと。それでもう一か月だけ粘らせて欲しいとたのんで、八月の終わり頃まで、頑張っていた。そして、運よく地下組織から連絡があり、ほとんど夜間行動をして、決死的なメコン河の渡河などもくり返し、とうとう開

放戦線の最前線拠点にまで案内されました。米軍は、それで、その地域に対して人道的にも非難された枯葉作戦を何回もやって、そして猛砲爆撃。第七艦隊から、砲撃して、それからB52で攻撃。もう、誰も任んでないだろうと思ってるんですね。それはそうです。あれだけ攻撃したら、人は住めっこないと私たちも思った。ところが行ってみたら、若いゲリラ兵がたくさんひそんでいた。もうこれは、誰も知らなかったことですが、地下が全部トンネル。そのトンネルを全部延長すると二百キロにも達するということです。ベトナムの土壌は堅いから、コンクリートみたいなんです。爆弾の地上に対する破壊力は凄いんですが、地下に対しては、わずかに四メートルくらいしか及ばないのだそうです。そうすると五メートル以上深く掘っておいたら、地響き程度で直撃弾くらってもなんともないんです。

だから、解放軍はそんな所に潜んでいた。アメリカ軍はもう壊滅したつもりでいる。それで夜になると、危険な敵前渡河を繰り返しながら、サイゴン周辺にやって来て、米軍の軍施設をロケット砲撃する。そして破壊しておいて、また暗いうちに帰ってきている。昼間はトンネルに潜んでいて、夜になったらそういう波状攻撃をしていたから、アメリカ軍は手を焼いたわけですね。

アメリカ軍はジャングルを枯れさせたら、上から発見でき

るから、そういう所には潜まないだろうと考えて枯葉作戦をした。ところがこれが人道的に問題だと非難されて中止しますと、西ドイツから、ドーベルマン犬を数千頭導入しまして、放したわけです。それから、水責め、煙責めもころみた。ところが何の効果も無かった。解放戦線というのは、民族意識で戦っている。ベトナム人によるベトナムの独立のために、だから礼儀正しいし、目は美しく澄んでいるし、貧しいけれども、戦う姿勢が立派だ。

それと、驚いたのは戦っている武器、弾薬、全て米軍の物なんです。彼等の武器はソ連製とか、中国製だと言われています。なんのことはない。最新式の米軍の武器を持っています。政府軍に一生懸命戦って、米軍が、政府軍に武器を渡すですよ。ところが裏から地下組織を通じて解放戦線側に渡った。軍医が持っている医薬品も全部米軍用なんです。日本製はラジオだけです。これにはびっくりしました。そんなことアメリカは全然知らない。私たちが、初めて知ったわけですね。だから、私たちの新聞記事見て、アメリカ軍も大慌てしたと思います。アメリカは大変な戦争をしたなど、その時つくづく思いました。私たちは、最前線の拠点にいたから、毎日のように砲撃にあっただけです。だから昼間は外に出れない。トイレに行く時が一番危険なんです。爆撃はいいんですよ。爆音聞いて逃げる余裕がありませんけども、第七艦隊の

砲撃は突然降ってきますから、最初の着弾でやられたらおしまいですね。

それから、恐ろしかったのは、舟艇が、メコン河から運河を遡って来ての攻撃。私たちが潜んでいた所の数十メートルまで、米軍の舟艇が数隻やって来て、エンジン音も聞こえた。でも、反撃できない。反撃すると、そこに潜んでいると分かるから、ひたすら隠れている。その時は、夜だったので、深いトンネルに入らなくて、地上の隠れ家にいたんです。トンネルの中は空気も悪いので。夜は大丈夫だと思っていたら舟艇がやって来て、突然、てき弾筒やら、機銃で攻めてきましたね。私は腰が抜けました。ダダダッといった瞬間に、一緒に隠れ家にいた七、八人の解放戦線の兵士らは、もういないんです。その隠れ家の下にトンネルがあって、それから深いトンネルに通じていて、そこへ瞬間に逃げ込んでいます。反射神経の素晴らしさ。私たちは腰が抜けて、全然入れない。それでやっと銃撃が一時止んだ時に入って行くと、「命を大切にしなければ。早く入ってこい」と。そう言われても、体が動きませんわ。だから、解放戦線の人の反射神経だったら、やられずに被害が少ないということはよくわかりましたよ。トンネル入っていれば絶対大丈夫なんですけども、上に出ている時にやられたらおしまいです。完全に米軍に運河と海とメコン河をおさえられてしまって、脱出は不可能と言われて

いた。

それで、私たちも、あきらめまして、せっかくの世紀の特ダネをどうしたらいいのか考えました。それでピンを一本用意しましてね。本多君が紙に小さい字で原稿書いて、代表的なフィルムとともに瓶の中に入れます。コルクで栓して、ロウソクのロウをたらして、これなら大丈夫というくらい栓を固めて、朝日新聞サイゴン支局の住所を書き、メコン河に流す用意をしていた。そんなこと、無駄だと思っただけでね、しないよりましだと。万が一誰かが拾って届けてくれたら、私たちが死んでもこの特ダネは日の目を見るのではないかと。そこまで覚悟していたんです。ところが全く奇跡的にある日、本当に奇跡的な脱出に成功したんです。

純朴な人々

なぜそういう危険な仕事を続けるのか、さっきも話したように自問自答するわけです。私は私なりに、なぜそんな危険をおかして仕事を、取材を続けてきたのかというと、これは一つ例を上げますと、私なりのはっきりした理由をもっているんです。

ニューギニアに最初に行った時のことです。ニューギニアといっても西半分のインドネシア領ニューギニア、つまりイリアンジャヤ。その中央高地ではいまだに石器時代の生活

をしているんです。世界でもっとも、原始的。その奥地に世界で初めて許可を得て、入れてもらった。そのころ、ニューギニアといえば、人食い人種でしょ。首狩族。そんな本が氾濫してました。記録映画見ても、人食い人種の国。もうそんなものばかりですから、私たちもそれを信じて、決死の覚悟で羽田を後にしました。

それで、セスナ機に乗せられて、中央高地の西の玄関口、エナロタリにつきました。そこからいよいよキャラバンを開始するんです。人食い人種がおると言うんで、アメリカの最新式の武器で武装したインドネシアの特行隊が三十人私たちを護衛してくれることになりました。当時、スカルノ大統領時代で、非常に親日家でしょう。だからスカルノ大統領の命令によって、私達を護衛してくれることになったんです。でもね、三十人くらいで護衛してもらっても、何百何千と人食い人種が出てきたら、数で負けますね。その時のために、通信隊が同行したんです。自家発電して、トンツー式です。SOSを発信するんです。そうすると、ビアク島から空艇部隊がやってきて、レインジャー部隊がバラシユートで降下して私たちを救出するんです。これほどまで守られたら、ちょっとくらい人食い人種が出て来ても大丈夫じゃないかということに、いよいよ、基地を出発して、キャラバン開始することになりました。私たちにも、拳銃をぶらさげて行けと言うんで

す。だけど、暴発したらこわいでしょ、怪我するから。それで、断わったら、インドネシアの特行隊の隊長のハミッド中佐が、「人食い人種が出てきたらどうするんですか。護身用に必ず持って行って下さい」と、撃ち方まで教えられて、嫌々腰にぶら下げました。

まず一日歩いて、カポーク族のある村に着くと、テントを張りました。私たちは新聞記者ですから、勇気を出して村の見物にでかけました。ジャングルの道を後ろから、原住民がついてくる。チョコレート色のはだに入墨をしています。鼻にはヒクイドリのツメを通してある。男はペニスケース一本だけのはだか。女の人は短い腰みのだけ。手には弓矢、漫画なんかに出てくる人食い人種のイメージにびったりですよ。後ろからついて来て、いつあの弓矢でやられるのかと思うと、冷汗が流れますよ。村ではどこの家からも、手招きして呼ばれる。それでこわごわ家の中に入って行きますと、薄暗い。段々目が慣れてくる。サツマイモやタロイモの焼いたやつやら、ストーンボイルしたやつを出してくれるの、食べろって。どの家でも同じように、必ずサツマイモとか、タロイモを御馳走してくれる。大変親切なんですね。「まあ、人食い人種やけども、親切だなあ。大勢の兵隊に守られているから、彼らよう手出ししないんじゃないか」と、その時は思った。それで、あくる日、別の村へ行きます。同じなんです。

次の日も。やがて、モニ族の世界に入ってくる。モニ族の村へ行っても同じ。それどころか、あくる日の朝テントたたんで、さらに奥地へ出発しようとしたら、「もつとこの村でゆっくりしてゆけ」と、引き止める。なかには非常に別れを惜しんで涙を流す者もいるんですね。今までの本や何かでの予備知識と、全く違うんです。純情というか、素朴そのものと言うんでしょうか、あんなに、純情な人といったら世界にいない。親切で、おしゃれで、はにかみ屋で、しかも涙もろいんですね。そういう事の体験で十日経ち、二週間もして、私達は、「ニューギニアには、昔から人食い人種は一人もいなかったんだ。あんなものはその昔白人中心主義の物の考えから伝わってきたことだ（歴史的に調べてもわかるんですけど）」ということに気がつきまして、護衛の兵隊全部帰ってもらった。拳銃も返しました。それで私達は丸腰で、さらに奥地に進みました。

どうとう、一か月歩いて、最奥の村に到着しました。ウギンバという村ですけど、そこで約二か月間指一本食われずに、非常に楽しく、平和に暮らしました。本当に素朴、純朴でいい人達なんです。いよいよ、その村を離れる日か近づいてきますと、モニ族の少女が野イチゴをとってきて、私にプレゼントに持ってきました。その少女は、私たちがもうあした帰ると言うとうね、指おり数えて、「カバ、カバ、カバ、カバ」

と、言いながら泣き出したのです。モニ語でカバというのは「ここ」という意味なんです。つまり、かの女は何を言っているかといったら、「ここ、ここ、ここ、ここ」。つまり、

「今日もここにいて欲しい。あしたもここにいて欲しい。あさってもここにいて欲しい。しあさってもここにいて。ずっとここにいて欲しい」と言つて、そのモニ族の少女は泣いたのです。私たちは男ですから、めったに涙なんて流したことはないんですが、そのときは感動して、本当に私も本多君も涙ぐんでましたよ。この人たちが全世界に人食い人種と呼ばれていたとは、なんとひどいことだと、おおいに憤慨しました。

それで、日本に帰つてからもう一度、世界中のニューギニアに関する本を読み直してみました。そしたらみんな想像で書いていて、はっきりしない。人食い人種の国というような題名をつけている。そんな本が氾濫してますけど、人食いの事実を目撃した人は一人もいない。証拠の写真が、世界中のニューギニアに関する文献の中に一枚も無い。探検行くのにカメラ持たずに行く人なんていないでしょ。人を殺して、うまそうに料理して食べている証拠の写真がまったく無い。これ全部調べていくと、白人中心主義のものの考え方から、スタートしているということが、はっきり分かった。

だから、食べるために人を殺す。うまそうな人間がきたから殺すという習慣は、昔から全く無い。戦争の犠牲者で死

だ人を動物性蛋白源が不足だから、食べるというのは、これは、飛行機が山中などで遭難した場合、白人でもやつてますから、同じことなんですね。だから、私たちはおおいに憤慨して、見ると聞くとは大違いであることを痛感しました。そこで私たちが実際にそこへ行って体験して、この目で確かめて、真実を報道するのは、皆さんに対する義務ではないかと。一種の使命感みたいなものを、私はその時に、強く抱いたのです。この使命感のようなものが、危険をおかしてまでも探検を続けさせる原動力ではないか、と私は思います。だから、探検を続けてきたんだと、私は断言できると思っています。それが私なのはっきりした理由なんです。

環境に適応した生活文化

私は世界の秘境を、随分あちこち探検してきましたけど、生活のすべてを共にするという事、同じ物を食べ、同じ服装をし、同じ家に住む。これがいわゆる「フィールドワーク」ですね。そうして取材することによって、まず仲良くなる。心が通じあう。それから、言葉も早く覚える。これは、言うのは簡単ですけど、非常に苦労が多いわけです。例えば私は普段から好き嫌いが大へん多いんですよ。だから私、あんな所へ行つて、変な物食べられるかなと自信がなかったんです。例えば、最初に行つた、エスキモーですね。エスキモーの



カリブーのなま肉をかかえ、口もとで切りながら食べるエスキモーの少年

社会では、生で肉、内臓を食べるわけです。持っていった食糧は、アプローチ用で、すべて現地食主義。もう、悲しいけど、生きるために食べ始めました。生の肉、内臓。だけど、人間の環境に対する順応性がいかに素晴らしいかを、私自身で体験しました。私みたいに好き嫌が多い者でも、他に食べれる物がなければ、肉、内臓を生で平気で食べられるようになった。見てたら、エスキモーは、肉よりも内臓のほうを主に食べます。何故かという、内臓には栄養が沢山ある。

例えばライオンがシマウマを襲った場合、内臓しか食べないですね。残された肉はハイエナとか、ハゲワシだとかが頂戴する。内臓が一番栄養があるためです。エスキモーもそうです。生活を共にして良く分かったのですけども、エスキモーの住んでる世界というのは、ほとんど一年中、水原です。夏一部、コケなんかが生えてきますけども、ほとんど植物が無いんですよ。つまり、食べるにしても、植物性の食料は一切ない。野菜が無い。穀物が無い。果物もない。人間は野菜がなければ、栄養のバランスが崩れます。壊血病で死んでしまう。エスキモーは野菜をもたないのに、なぜ壊血病にならないのか。それは生で食うからです。生で食べるのは血を飲むのと同じなんです。血液の中に全ての養分が含まれている。だからエスキモーは私たちと同じように、火を通して煮たり、焼いたり、油であげたり、いためたりして食べると、エスキ

モーはとっくに絶滅してこの世に存在しません。だから生で食べるのは野蛮だなんてとんでもない偏見。これぞ食文化でしょう。文化の違い。今や国際化時代、食文化に対する理解というのは、大切なことですね。特に日本は島国でしょ。島国根性とよくいわれますけど、異文化への理解のなさは、今の若い人もあまり変わってない。

例えば、私が東南アジアへ行って、ヘビを食べてきた。パラワン島でオオコウモリを食べて来たと言うとね「うわー、野蛮だ」とか、「ゲテモノだ」とか、言いますね。だけど、ヘビやオオコウモリを食べているような人達は、日本人がウナギを食べると言うのと、びっくりしますよ。それどころか、ナマコやウニ、もっとびっくりするのがタコ。タコを食べる民族は、世界中に日本人とあと、ちょっとしかいませんよ。あれは、怪物、ばけものだと思っていますよ。ただ、これは文化の違いですね。だから、ヘビを食うから、オオコウモリを食うから、野蛮だなんて、とんでもない偏見です。全く文化の違いです。私はいろんな食生活を体験して、つくづくそう思います。

だから、なんでも、そこで考えだされた食べ物とか、着る物とか、住居とか、長年の生活のちえてできたものが一番優れているわけです。さっきの樹上家屋もそうでしょ。エスキモーの雪の家もそうですよ。遊牧民の家は、パオですね。あれ

なんか、分解するのにも、組み立てるのにも、素早くできるし、保温性はあるし、防音効果もあります。草を求めて移動をつづける遊牧民にとって、あんな優れた住居は他にないと思います。だから、人間の生活の知恵で出来たものは一番素晴らしい。私は最初のエスキモーの生肉生活で、ド肝を抜かれましたけど、それから、どこへ行っても食生活には平気です。私はヨーグルトやチーズ類が嫌いなんです。遊牧民の村に入ると、嫌々食べ始めるのですが、段々慣れてきて、チーズ、ヨーグルト、バターなどなんでも食べます。梅棹先生が言うように、「遊牧民はミルクを食べる」生活です。乳製品が主食ですから、ミルクを食べて生きています。そういう生活も私は体験してきました。

それから、言葉の問題ですね。私たちの行く所は、辞書もなければ、会話の本もない。ではどうするのか。これは一番不安だった。エスキモーの村に行つて最初に覚えた言葉は「イヒヒヒ」というもの。これが挨拶なんです。こんにちは、こんばんは、さようならなど、なんでもイヒヒです。これは難しいですよ。「イヒヒヒヒ」と笑うんですけどね。顔を見合せて、大きな声を立てて、表情豊かに、これ以上笑えないというくらい、素晴らしい笑顔をたたえて笑わないかん。私たちは普段から難しい顔していて、私も本多君も笑うのは得意じゃない。だから努力して、練習して、エスキモーと顔

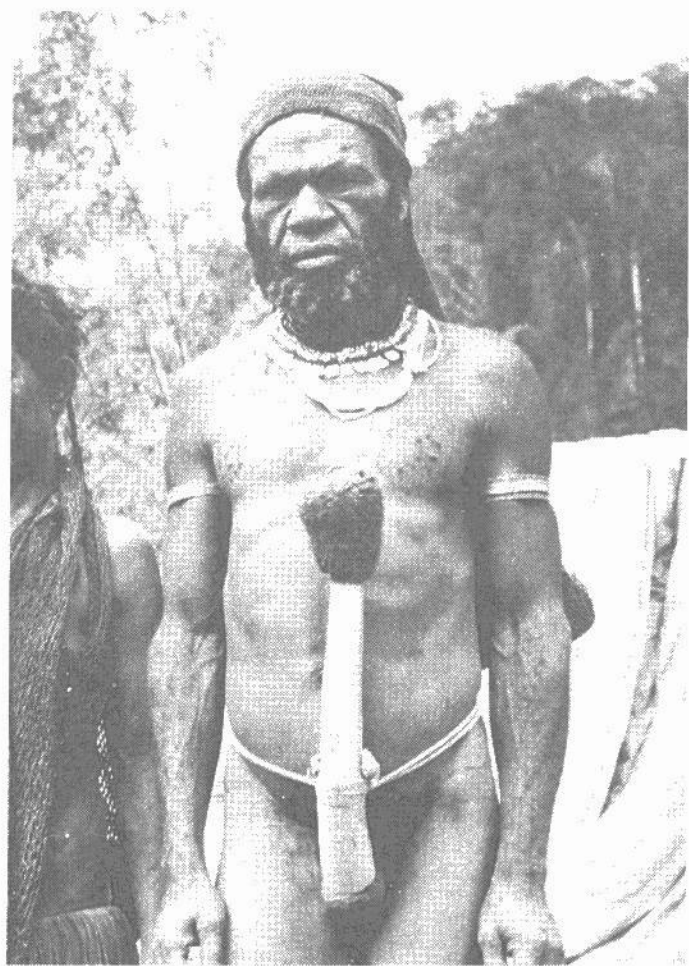
合わせたら、「イヒヒヒヒ」。まるで頭がおかしくなったみたいで、村にいる一か月間、朝から晩まで「イヒヒヒ」と笑っていたんですよ。これがあいさつの言葉だからしょうがない。ある日、遠くの村の村長一家が、シロクマ狩りに行って、大きなシロクマをそりに積んで、私たちの村を通りかかった。私たちの村の村長も出てきて、その村長さんと久しぶりに会って顔を合かし、向かいあって、「イヒヒヒ」の挨拶を始めた。素晴らしい絵になる顔なんです。これは写真とらにゃいかんと、私は慌てて、家の中に行って、カメラ取って外へ出た。部屋の中はすっ裸でいられるくらい暖かいでしょ。外は零下三十度。レンズが曇りますがな。早くレンズの曇りが取れないと、笑いのあいさつが終つてしまうからと慌てた。ところが、慌てることは無かった。五分以上も笑つておった。びっくりした。よく聞いていたら、「イヒヒヒ」の間に時々、短かい単語が入るんです。人の名前かなにか、「イヒヒヒ、何とか、イヒヒヒ、何とか」二人でほとんど笑っている。久しぶりに会って、誰は、元気かとか、どうだとか、そういうことがすべて笑いの中に含まれている。だからエスキモーの笑いの挨拶は、すごく芸術的だと思えましたよ。というわけで最初に覚えたエスキモー語は「イヒヒヒ」なんです。それから、単語の採集。なんでもかんでも自分で単語を採取していき、単語集を作っていくんですよ。そして単語の羅列から会話を始める。

単語の並べ方が間違っているようだが、必要な単語を並べたら、意味は百パーセント通じますよ。たとえば「私は水を飲みたい」というのを、「飲みたい、私、水」でも、「水、私、飲みたい」でも意味はびたり通じます。ただ、並べ方も、英語より日本語に近いとか、そういうことが、段々わかっていく。だから、最初不安だったんですけど。一週間か十日たてば、片事の会話は、覚えられるし、一か月もおれば、かなり上達します。「我こそは語学の天才なり」と、自ら暗示にかけることによって、不安はふっとびます。だからニューギニアへ行っても、アラビアに行っても、それからキルギス族の村やチベットへ行っても、言葉に不安を感じた事が無い。私たちは文明人だから、彼らより優れているなんて、とんでもない話です。対等の人間であるという気持ちでつき会うかぎり、言葉なんてなんとかなると、思いました。次は服装の問題です。私たちが北極圏にいたのは春から夏にかけてですから、零下三十度くらいしか体験してないんですよ。冬になると零下六十度になる。零下六十度の中で、どうして生活できるのかというと、エスキモーは動物の毛皮を利用して世界最高の防寒服を着ているからです。トナカイとか、アザラシとか、そういう毛皮を利用した服なんです。

アラビアへいったら、アラビア服ですね。あれは灼熱の太陽を防ぐには最も適していますよ。私はキルギス族の中で三ヵ

月過ごしたことがある。キルギス族は、中国の一番西の端、ソ連との国境に近い、パミール高原の四千メートルくらいある所に住んでいる遊牧民なんです。ここは、ヒツジの毛で織った服装なんです。それからフェルトなんかも使います。そこに一番適していますよ。どこへ行っても、日本から持っていた服装よりも、その土地の人の着る服装が一番適していると思います。

ただ、生活のすべてを共にするといいながら、同じ服装ができなかったのは、ニューギニア。先程言ったように、ベニスケースでしょ。おちんちんに、ヒョウタンのからで作った筒をつけるんです。私たちは、暑い所だから昼間の服装はラニングシャツと短パン。ところが、見学者がいっぱい。遠くの村からも、サツマイモかついで、野を越え、山を越え、見学にやって来る。彼らは服を来た人間を初めて見るわけ。その世界では男は全部ベニスケース。女の人は腰みの。シャツやパンツ着ている人間は初めて見るんだから珍しい。見物人がどんどんくるわけ。そして来た人が皆汚い手で、シャツやパンツをつかんで引っ張ったり、匂いを嗅ぐ。川で洗濯してもすぐどろどろになるんです。だけど、自由に触らせないと仲良くなれないでしょう。カメラでも自由にさわらせる。彼らの不安を取るために、何でも自由にさわられます。それにしてもあんまり次から、次ときて、引っ張って匂い嗅いだ



ニューギニアの中央高地のウギンバ村では、実力者ほど立派な
ゴサガ（ベニスケース）をつけている。（モニ族の男）

りするでしょ、仕事になりませんわ。それで本多君と考えて、同じ服装しよう。そうしたらめずらしがられずに済みますから。私たちもベニスケースをつけようと考えた。ところでは、彼等は、どのようにしておしっこをするか。ベニスケースは、立派な衣装です。私たちの背広のズボンと同じです。もちろん先からとばしません。外してします。彼らはおしっこの時もしゃがんでしますね。遊牧民なんかも皆そうです。トイレの時は一番無防備でしょ。いつ襲われるかもわからない、猛獣にやられるかもわからない。だから、必ず、低くしゃがんでします。ニューギニアの中央高地で男に生まれたら、みんなベニスケースをつけなければならぬ。しかも人一倍立派な、太いものをするほど皆から尊敬されるのです。そのためにはおちんちんを石でたたくなどして、苦しみながら大きく育てるわけです。タイの山岳民族で、女の首の長い人がおるでしょ。それから、アフリカには下唇の長くつきでた人もいます。あれは何年も何年もかかって苦しみながら、段々輪を広げていって、長くする。首の輪も少しずつ増やしていって長くする。人より少しでも長ければ、長いほど美人なのです。美の価値判断が違うのですね。ハワイだって昔そうでしょ。太っている程美人だった。

話をもとに戻しますが、私は結局ベニスケースをつけるのは、物理的に不可能だということで、ニューギニアでは同

じ服装ができませんでした。

秘境の糞尿談

それから、秘境の探検で一番何に苦労したかという、実はトイレなんです。私は、個室に入ってしゃがんで、安心してトイレ出来るといふのは、なんて素晴らしいものかなと、思いますよ。エスキモーの村におった時には、皆家の中で大小便をするんです。だけど、私たちは客人でしょ。そんなの恥ずかしいから外でやる。春先で零下二十五度くらいですから。自然の水のついたての影に隠れてトイレするわけ。しゃがみますと、エスキモー犬が、いつしか、二重になり、三重になり、輪のようになってとり囲むんです。村には八十頭のエスキモー犬がおるんですね。その犬たちがキバをむき、うなり声をたてながら寄ってくるんです。終るとわっと来て喧嘩して、一番強い犬が食べます。エスキモー犬が村にいる時の、最大の御馳走は人間の排泄物なんです。村にいる時、餌を沢山やると、お腹がふくれて、そりを引っ張らない。いつも飢えているんです。それで犬そりでアザラシ狩りや、トナカイ狩りに行ったとき、大猟になると必ず犬にも沢山食べさせる。犬はそれを知っているから、必死になって引っ張るんです。だけど、普段は人間の排泄物だけ。そんな事知らないから、トイレ行く度に私はノイローゼですわ。そこでトイレ

に行くときは、氷を割って下から石ころを拾い出して、ポケットにいっぱい入れて、しゃがみながら投げつけました。私、その前にペルーアンデスに行っただけです。登山隊の隊長として、ペルーアンデスの最高峰の、ワスカランに初登頂したんです。そのベースキャンプは氷河の上だと居住性が悪いでしょ。冷えますから。そこで氷河ぎりぎりの草地の上に張りました。ところがいつしか、十数頭の真っ黒い大きなウシがまわりに住みついた。

実はペルーとメキシコとスペインとこれら三つの国は闘牛が国技なんです。闘牛用のウシを、奥地の牧草地で育てているのです。しかも、私たちのヤッケもテントも真っ赤なんです。いつ襲われるかもわからない。ウシは色盲です。お客さん用に派手な赤いものでやっているのです、実は黒でも何でもいいんですね。動くものに来るわけ。だけど、そんなの知らなかったのです、真っ黒い闘牛のウシに恐怖をおぼえた。それどころか、しゃがんでいたりしたら、足で地面蹴って待ち構えているんですよ。あれは、塩分を求めて来るんです。乾燥地帯だからおしっこが草地やら、岩にかかりますと、すぐに塩の結晶が出来るんです。ウシは特に塩が好きで、それをなめに来るわけです。だから石を投げたって、絶対に退散してくれません。とうとう、私たちは怖くなって、氷河の上までベースキャンプを上げた。氷の上は居住性が悪いけども、

ここはウシが来ませんからね。

ニューギニアへ行ったとき、ここでは、ブタを飼っているんです。ブタといっても、まだ進化してませんから、イノシシそのものなんです。真っ黒の。ジャングルに入って行って、人の来ないような所でトイレをしようとすると、どこからともなくそのイノシシがやって来る。鼻をフーッと鳴らして、地面を蹴って待ち構えているんですよ。イノシシにとって人間の排泄物は最大の御馳走です。中国なんかでは、いまでもトイレの下でブタを飼っている地方もありますから、同じです。イノシシのようなブタが近づいて来て、待ち構えているものですから、落ち着いてできないんです。

サウジアラビアの砂漠の遊牧民の村で生活したとき、ここにもトイレという建物が無いでしょ。遊牧民はどうやって、排泄物を処理するのかと、不思議に思いました。郷に行つては郷に従え、彼らの方法を習わないかん。だけでも、そんなことわからない。困っているうちに暗くなってしまった。満月の夜に、私たちのテント式住宅から、三十メートルくらい歩いて行って、私は砂漠の上で用を足した。それで、いざ帰ろうと思って、月明かりでふと見たら、今出したはずの物が無いんですよ。何か動物がやって来て、食べたという気配も足音もまったく無い。昼間直射日光の下では摂氏五十五度でしょ。テントの中の日影でも四十七、八度の暑さなんです。

よ。そんな暑さは初めて体験しましてね。だから、暑さで頭がいかれたのかと思いました。出したはずが出てなかったのかなど、考えながら帰った。テントに戻って本多君に話すと、「それはそうだ。暑さに頭いかれてるのや。出したものが消えるはずがない」と言われた。一晚考えて、おかしいな、出したはずやと。あくる日は懐中電灯を持っていった。まず一切れ出して懐中電灯で照らした。今落としたはずの物が無い。おかしいな。今度はぶらさがっている空中から懐中電灯で照らしたんです。汚い話ですけど。私の糞が地面に着いたと同時に、スーッとひとりでに歩きだして、穴の中にフッと消えていった。その瞬間、私はぞくぞくと冷汗が流れて、もう本当に怖くて、恐怖感に襲われました。だけど、いつまでも恐がっているわけにいかないから、もう一回と思って、今度も落とす前から、懐中電灯ですつと照らして。そこで分かったんですけど、いわゆる「スカラベ」、日本では「フンコロガシ」といいますね、コガネムシの一種。これのいたずらなんです。それから後で、色々観察して分かったんですけど、スカラベは風下から、物凄いスピードで音も無く飛んで来る。新鮮な糞ほど好むわけ。長い後ろ足で扶んで、前の四本足で勢よく運ぶ。砂漠にはヘビ、トカゲ、ネズミ、サソリなどの穴があるんですよ。それから、スカラベ自身が掘る穴もある。夜行性動物がいっぱい居ますから、いたるところに穴が

ある。その一番身近な穴に引きずりこむ。スカラベは食べながら排泄するんです。メスはそれに卵を産む。人間の糞の栄養によって卵はかえるという、不思議な習性がある虫なんです。これは、古代エジプトでは、聖なる虫。神様の使いと崇められた。だから、ツタンカーメンなどのいろんな秘宝が出てきますよね。ああいうところに必ず、スカラベの護符がついています。どの文献にも、アフリカのサハラ砂漠あたりには沢山住んでいると出てくるが、アラビアの砂漠にもスカラベが住んでいるというのは、全然文献に出てこない。だから私たちもその知識がなかった。それで、なるほど、砂漠にはトイレが無くて、清掃人が無数に住んでいるから、清潔だなと思いました。

それから、ベトナムに行きまして、メコンデルタの農村で、農民と同じ生活をしたことがあります。ここではトイレが池の上なんです。池の中央に突き出ているんです。棧橋みたい。またいで入んですけど、しゃがむと腰から下は隠れるように、ヤシの葉で四角く囲んであります。私がズボンおろして、座り込みますと、下から魚が大きな口をあけて一杯群がる。口を開けて待ち構えているのです。中には飛上がつてくるやつもいる。水がはねてお尻はびしょぬれですよ。タイワンドジョウ、草魚、雷魚のたぐいです。それらの魚を人間の排泄物で育てている。これもあまり落ち着いて出来ません



ベトナムのメコン・デルタの農村のトイレ。糞で池の魚を育てている。

でしたね。だから、散々ためておいて、しゃがんで、さっと出して、すぐ逃げてこないといけません。飛び上がってきたやつにお尻をくいつかれたら、どないしようかと。もう、これは、びっくりしました。

その後、その村の人に、「この魚をあなた方も食べるんですか」と聞いたら、「とんでもない」という。それじゃどうするのかというと、全部サイゴンの市場に売り出すのだそうだ。そんな魚食べさせられるほうこそ、迷惑だと思っていたら、市場に出す前の一週間は便所を閉じます。そしてヌカで育てるのです。最後の一週間は魚の身を清めて、それから市場に出す。だから、良心的だなあと思いました。

私はいたるところでトイレに一番苦労して、恐怖感に襲われた経験があるのです。個室でゆっくりトイレ出来るなんて、なんと素晴らしい事なんだろうと、つくづく思います。

討論

稲場（司会） 先生、有り難うございました。感動的なお話や愉快なお話をうかがわせていただきました。

それでは皆さん、これから少し時間を頂いて、先生になるべく下水文化に関する質問をして、それを通して先生の様々のご体験を下水文化という観点から出来るだけ引きだしたいと思います。

先生、失礼のある場合はお許し下さい。先ず藤森さん、どうぞ。

清潔ということ

藤森 今、いくつかの国で、トイレに行かれて、非常に不安だったという話を御伺いしたんですけど、我々日本人は個室で隔離されているせいもあるんですけど、トイレ行くのが楽しみですよね。ある意味では。現地の、向こうの方々はどうなんでしょうか。それが一つですね。もう一つはトイレレットパーみたいなのは使われているのでしょうか。

藤木 トイレレットパーのことですけど、例えば、北極のエスキモーは紙を持たないから、雪で拭くのかな、どうするかなど思っていました。私たちはトイレレットパーを大量にもっていった。それでエスキモーと旅した時、ある男はさっさっさつと、水原に行つて毛皮のスポンをさつとおろして、終つたらさつとズボン上げて戻つて来た。私はしらん顔して散歩するふりして、その近くに行つて見たら、糞は落ちていりゃど拭いた紙はない。ああ、やりっぱなしで、何も拭かない、汚いなど思つたの、最初。普段、私たちは大量に食べて、大量に排泄するでしょ。ところが、動物性の生肉、内臓しか、食べない生活を続けて行くうちに、不思議なことに、私たちも拭く必要がなくなつてきた。犬の様に真っ黒で

臭いんですけど、ころつと出るんですね。脂肪に包まれたように、つると出る。全然紙を使う必要ないんです。そういう体験は初めてで、これは便利だと。寒い所でお尻を長い間出さなくてよいし、終わつたら直ぐズボン上げられるでしょ。だから私たちもそれから、エスキモー方式で、ずっと紙使わず。全然汚くないですよ。都会のホテルに戻つて文明生活をすると、トイレに行つたら紙を使わないかん。なんて、文明生活つて不便なんだなど、思いますね。もちろん、裸でジャングルで暮らしているようなニューギニア高地人なんか、もちろん紙なんか使いません。拭きもしません。

遊牧民のキルギス族は、水で洗います。それから、アラビアの砂漠もそうでした。オアシスに井戸の水が沢山ありますから、瓶とか、そういうのに入れて、使います。いいんじゃないですか。痔にもならなくて。

話ばかりですが、秘境の人々はほとんどが一生風呂に入らないのです。私たちが一週間か十日も入らないと臭くなつて、垢がいっぱいたまる。ところが彼らは全然そんなことなくて、綺麗ですよ。臭くないですよ。その代わり寝る時、エスキモーにしても、遊牧民のキルギス族にしてもすっ裸になる。必ず、すっ裸で毛皮にくるまる。だから一日一度は裸になるので、その時に新陳代謝でポロポロツて剥がれるんじゃないかと思うんですよ、汚れが。だから、一生風呂に入る必

要も無いのだと思いますけど。

それから次の質問は、むこうの人はトイレをする瞬間を楽しんでるかということでした。

楽しんでるかどうかは知りませんが、中国の地方へ行ったら、並んでしますよね。男と女の囲いは別々にあるけど、しゃがんだら、下半身が隠れるだけで、皆それは平気ですよね。となりの人としゃべりながらしているのなんか、楽しんでるようにも思えますね。

ペニスケース

照井 ニューギニアの先程のペニスケースなんですけれど、あれはどうして身にきちんと着けているんですか。

藤木 紐でしばって胸や腹にそわせて固定しますね。彼らは下腹が出て太鼓腹になっているから、真つすぐのペニスケースをつけると、外につき出る。だからジャングルにひっかかりますね。そのために、自分のお腹のカーブに合ったペニスケースを作らなければならぬ。その作り方は大変なんです。材料のヒョウタンは食用なんです、格好のいいのがあると、ペニスケースづくりにとりかかります。ヒョウタンといつても日本のヒョウタンとちがってそのヒョウタンを横にして枝でささえ、小石を少しずつ乗せていってカーブをつける。そして自分のお腹のカーブにぴったり合つて、長さも

太さもうまいこと育った時に初めて蔓を切る。それから中のすを抜いて、泥土の中に一月くらい埋めて、あとはいろりの緑でブタの油をぬり込んで、日影干しにします。だから青い実をみつけてから、出来るまでに二、三か月かかる。

水と生活

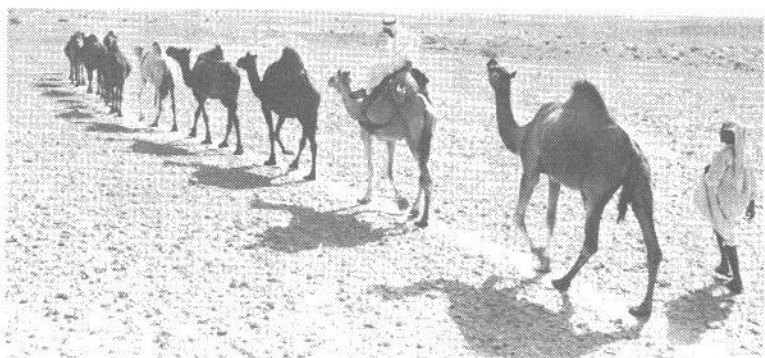
照井 水に関わる事なんですけども、日本人というのは、旅行に行くとき、非常に水との関わりというのがあるんですけど、あるいは水神様を拝んだりですね。水への考え方というのは、我々の農業みたいな生活との違いというのはあるのでしょうか。

藤木 水ですか。たとえば、遊牧民には非常に水が貴重ですよ。遊牧民は自分よりも、動物をいかに立派に育てるかというのに命かけているんです。だから、ある遊牧民は、夏は高い四千メートルくらいの所へ上がって行って、冬は下へ降りてくる。その高い所は、雪解けの夏になると、緑がわつとわく。その草は新鮮でおいしくて、栄養がたっぷりだから、その草を食べると家畜は太って、毛艶が良くなる。乳の出も良くなる。だから、断崖絶壁を越えてまで、そうやって次から次に移動するわけ。アラビアのような、平面移動する遊牧民は家畜に大量の水を与えなくてはならぬ。だから、井戸オアシスの村にすんでいる。その水脈をどうやってみつけたの

かも、不思議です。何百頭のラクダが村に帰ってくるともう、大忙し。ラクダは四日に一度、ヒツジ、ヤギの類は一日半から二日に一遍水を飲みに戻ってくる。

井戸水の水源がはるか離れた所にあるというのは、不思議な話です。川というのは、私たちの常識では、海に流れる、湖に流れるでしょ。ところが、タクラマカン砂漠を飛行機から見て、びっくりしました。天山山脈から、雪解けの水が流れてきて、あちこちにオアシスの町をつくり、流れの最後はタクラマカン砂漠に吸い込まれている。その場所を飛行機で真上から見たら、渦巻いて、地獄絵みみたいな感じがしたんです。川が最終的に砂漠に吸い込まれるなんて、日本では考えられない。だから、チグリス、ユーフラテス川も同じように、砂漠に吸いこまれていく。その水が、何現象というんですか、毛細管現象というのかな、かなり離れた、南の方まで、その水脈はつながっているとされていますね。ちょっと信じられないんですけども。だけど、その水脈を最初に見つけた遊牧民は偉いと思いますね。だから、水に対するありがたみと、いうのは、大変なものだとおもいますよ。その水のあるところしか住めないから、そこに村が出来る。水脈がある所に井戸オアシスの村が出来る。人間の飲み水はしれてまずけど、家畜は大量に飲みますからね。家畜を立派に育てないと、自分が生きていけないのです。家畜を立派に育てる事に命をか

灼熱のサバクを、草をもとめて遊牧の旅に出るラクダの群れ（サウジアラビアのネジド地方）



けている。そのために水が大へん必要だということですね。

拭くという行為

渡辺 私はNHKのテレビで、ニュージーニアの高地人というのを見たことがあるんですが、食事はタロイモが主食だということを書いてました。エスキモーは確か肉食なものですから、排泄物がぼろぼろなのは、分かるんですけど、タロイモだと、かなり水分多いような気がするんです。量もかなり多い。お尻がしまっただけでは、きれいにならないような気がするんですけど。

藤木 確かにその通りです。

渡辺 拭かないというようなお話なんですけども、それで済むのかなという気がするんですけど、先生は御自分でも、タロイモやなんかは、めしあがった体験ございますか。

藤木 食べます。私たちは現地食主義ですから、ニュージーニアにおった間、ずっとタロイモ、サツマイモです。

渡辺 排泄物はいかがでしたか。

藤木 タロイモ食べては、二人とも下痢するんですよ。それで、サツマイモを主に食べていたわけ。ところが、タロイモのほうが量が多いですから、彼らは好んで食べる。特にタロイモをストーンボイルすると、私たちは下痢する事が分かっていたんです。それを灰の中に入れて、長い間時間かかけて

焼くと、白いヤニが無くなるんです。焼くと私たちは下痢しない。

それと、もう一つは、マラリアが怖くて、マラリアの予防薬をずっと飲み続けていたんですね。熱帯熱マラリアで死ぬ例もありますから。ところが当時はいい薬が無くて、副作用が強い。飲んだ明くる日、物が黄色く見えたりしました。それで、肝臓を悪くしたり、胃腸を悪くした。そこへもってストーンボイルしたタロイモ食べて、私も本多君も下痢したんですね。

私たちは、もちろんトイレットペーパーを大量に持って行って、使ってみました。彼らはトイレットペーパーを使わないでしょ。だから、エスキモーのようにそのままズボンはいても大丈夫にならないと思う。

渡辺 そんな気がするんですけど、僕も。何かの葉っぱで拭くなんてことは無いんですか。

藤木 全然拭かない。葉っぱも使わない。それで、私たちの小屋へ遊びにくるでしょ。そして私達のフィラムの木箱などを椅子がわりにしている。そこに座っていった後が臭いんですよ。あきらかに排泄物の匂いなんです。私たちがテントを張って診察室作ったの。そのテントにやって来て、ベチャとすわったら、皆そうなるんです。だから、クレゾールで消毒したりね。

渡辺 そういうことは、まさに習慣で彼らにしては苦にならないんですね。

藤木 全然ならないですね。あそこは、藁でも、草でもなんぼでもあるから、拭けばいいと思うんですけど、ふかないですね。やりっぱなしという感じですよ。

排泄の場所

藤井 先程、排泄するのに、ベトナムでは固定した場所があるというふうに向ったんですけども、他の民族は排泄する場所というのは、どこか固定化しているんですか。

藤木 いや、どこでも。例えば、遊牧民の村なんかですと、私たちは、はずかしいから夜行ってましたけど。アラビア服ってご存じないですか。裾が長くて広がっているから、こうしゃがんでも、全然見えないですね。女の女なんか、特に便利だと思えます。スカートみたいに広がる。だから、昼間でも平気で、何処でもしてますよ。あれは便利ですよ。つくづくそう思いましたよ。

物質文明との狭間

石丸 そういう辺境の方へ行ってしまうと、それなりに、自然の力も大きいんですけど、辺境から少し離れた所、例えば、集落とか、多少町らしい形でできたような、だから、ち

ょうど文明と辺境との境目の所では生活文化とかそういういったものは、段々文明に近いというような形でできているのか。

藤木 要するに、文明が入ってきているところと全然入っていない所の中間、そのへんはどうかということですが、これらの人は一番不幸だと思えますよ。過渡期というのか、徹底的に教育を与えて、文明化すればよいのだが、なまじっか物質文明だけが入って来ていて、それで、教育も受けてない人なんか生活見ても、不幸、かわいそうに私は思いますよ。なまじっか文明が入ってきたばかりに、物質欲だとか、そういうものがあるでしょう。

全然話違いかもしれないんですけど、私、キルギス族の取材に行くとき、ちょうどNHKが一年前にそこへ入って、番組が始まっていた。シルクロードをラクダの隊商が延々とつづくあの画面ですがね。いまはシルクロードはどこも車が走り回ってますよ。空は飛行機。鉄道もあります。だけど、シルクロードの映像を作ろうと思ったら、あつちの村から、何頭、こっちの村から何頭、ラクダを集めて並んで歩かせないと、イメージがわかないでしょ。だから、私もNHKのプロデューサーだったら、同じことやりますわ。あれをしないと、感じ出ないですよ。

私は、スパンというムスターグアタ山の山麓の村にまず行



中国の最西域パミール高原の奥地に住む遊牧民キルギス族。うしろの山は六千以上の無名峰

きました。私はその村でテント張った。そしたら村長がやってきて、三百元出せという。日本円で四万円、遊牧民にすれば大金です。それだけなぜお金を要求するのかというと、村長がいうには、三百元でしたら、一年に一度のお祭りと、結婚式とバザールとそれから、ヒツジの死体を奪い合うウマの競技を四点セットにして実演してやるというんです。びっくりした。それで、私は断った。「アメリカもやってきた。イギリスもやってきてた、日本もやってきた。私が全部三百元でやらせてやった。断ったのはおまえだけだ。」と、怒るから、百円ライター十個ほどやったら、もうそれで、収まったんです。これはテレビの宿命なんです。やらせをしないと、いい番組、楽しい番組が出来ないんです。私がテレビの番組作るとしたら同じことしますよ。映画もそうでしょ。映画撮るのには、物凄い時間かけて、NG、NGで、やり直して、やるわけですよ。だけど、本当の奥地は素朴なんですよ。しかし中間地帯はお金や物が欲しい。ほしがる欲があるから、お金で芝居しよる。商売です。

石丸 だから、辺境の所は、むしろ、辺境にそったような形で、自然な、適応した生活しているんですけど、一方、中途半端なところが、物質文明のために一番混乱して色々大変だという感じがしたわけです。

藤木 あのね、物質文明が入ると、ときめんに生活に金が

いるようになる。奥地の生活に金なんていりませんよ。全て自給自足でしょ。昔、私たちが住み込んだ村のエスキモーは本当にお金なんかもってないし、やっても喜ばない。ところが、段々、文明化している。北極圏は軍事基地としても重要だし、天然資源の開発あつての北極圏。だから、基地建設のためにエスキモーが集められる。だから文明化して、お金を欲しいがる。今までは犬そりで、狩猟に行っていたのが、もうお金を出せばスノーモービルや、いろんなものが買える。故障したら、また、買い代えなきゃいかん。高くつく生活をしている。これは大変ですよ。昔のお金がなかった生活のほうが、よほど幸せ。私はそう思います。徹底的に文明化してしまえばいいんですが、過渡期が一番不幸ですね。エスキモーは酒なんか全くしらなかったのに、酒覚えてね。

ごみの捨て方は！

中村 一箇所にまとめてごみを捨てたりするとか、それぞれ、うちをそこらじゅうでやるのと同じに、ごみを例えば、動物なら、動物の骨とか、そういうものを、ほったらかしにするんですか。一箇所に集めたりするという習慣はないのですか。

藤木 北極のエスキモーの原始的な生活では一箇所に集めるなんて全然しないでですね。獲物の動物を解体するでしょ。

ほとんど、捨てる物はなくて何でも、食べたり、毛皮で服を作る。しかし、捨てるような、どうにもならないものは、ほったらかしです。だから、汚染されますね。だけど、寒い所だから、低温殺菌されて、いわゆる日本なんかのような汚染は寒い所だから、無いかもしれません。ニューギニアなんかもそうですよ。なんでも、みんなほおるけどもね。要するに例えば我々が山へ行って観光地で屑や、空き缶を捨てるのは違って、そんなものないでしょ。それこそイモの皮だとか、そんなもの、結局肥料になったり、土に還って行くのとちがいますか。

中村 そういうものが、集積するほどの人が集まっているわけじゃないんですね。

藤木 どこにでも捨ててますからね。ちょっと話がそれますが、今でも中国がそうですよ。このあいだ、登山隊が中国へ行ったでしょ。中国・ネパール・日本三国のチョモランマ縦走登山隊の事ですが、あの登山隊に聞いたら、日本隊はベースキャンプを撤収する時に、徹底的にごみを拾い、袋に入れて持って帰った。日本の登山者は、そういうふうに着育されている。ネパールの登山隊は、穴掘ったりして、埋めてくるんです。中国隊は埋めものにもせず、ほおってくる。それで、注意したら、「中国は広い」って。この前夜行の列車で、内モンゴルまで行きました。中国人は窓から空き缶でも、瓶

でもカップでも、全部捨てますよ。「中国は広い」、と言われてね。広いけど、人口は十億以上ですから、そういつまでも、通用しないと思いますけど。かつての日本もそうでしたよね。

台所がない！

稲場 先生、最後に、ニューギニアの状態で結構なんです。台所は、どういものなんでしょうか。

藤木 台所はありません。例えば、食料を貯蔵する習慣がぜんぜん無いです。だから、イモが主食でありながら、アルコールを発見する機会がなかったんです。年がら、年中同じ気候。毎日アルコールが降ります。植えれば育つという気楽なものです。今日食べる分だけ畑から取ってくる。年中なってますから。貯蔵する習慣がないわけです。必要なだけとってきて、それで大概の場合ストーンボイルにして食べます。つまりナベ、カマなど容器の無い生活ね。葉っぱでナベに代わるものを作る。容器が無いということと、貯蔵する習慣がないということ、アルコールを発見するチャンスがなかったんではないですか。

稲場 じゃ、水なども、溜めないんですね。水がめがあるとかいうことはないですか。

藤木 そういうことはありません。必要なだけ溪流から汲

んできます。汲んでくるものはヒョウタンの殻ですね。

中村 原住民というのは、進歩という概念は無いんでしょ
うけど、変化というのはあるんですか。例えば、昔から全く
同じなんですか。

藤木 それは、やはり人間の知恵というのは、段々進んで
行くでしょう。例えば、ニューギニアの場合、石器を見ても
新しいものは、昔の石器なんかとは、ちがいますね。種族に
よっても違います。ダニ族はモニ族より、ずっと石器に関し
ては進んでいる。だけど、石器と言ってもいわゆる摩製石器
ですからね。石器時代も、新石器時代に属するわけですね。

原石を割って、それを河原の石で砥いで刃をつけます。髭な
んかも、石ナイフで剃れるくらいです。だから、石器時代の
生活といってもちっとも不便じゃないと思います。だから、
文明国ほど、早い進展はないでしょうけども、生活の知恵で
段々と物が改善されていくのは、明らかに見えますね。

稲場 先生本当に有難うございました。随分興味深い、ま
た、感動的なお話を承りまして、本当に心から感謝しており
ます。私達の下水文化を考える大きなヒントになったと、つ
くづく思っているしだいです。これで、終了させていただきます。
ます。

(昭和六三年十月一日)